

子どものからだと体育教育の課題

その他のタイトル	The Physical Development of Children and the Important Issue of Physical Education
著者	田村 典子
雑誌名	關西大學文學論集
巻	56
号	2
ページ	1-15
発行年	2006-10-25
URL	http://hdl.handle.net/10112/12523

子どものからだと体育教育の課題

田 村 典 子

はじめに

今日、子どもの身体能力の低下は、運動面、健康面、精神面において社会的関心が高まっている。社会環境の急激な変化の中で、子どもの外遊びの減少や、遊びの質も乏しくなっていることは、単に体力の低下をもたらすのみならず、人間関係の希薄化、コミュニケーション能力の低下、身体感覚や身体知識の低下、など、強いては「生きる力」の低下にもつながる。このような状況に対処するために文部科学省は、いち早く2003年「新子どもプラン」を制定し、完全学校週5日制の下で、「子どもの居場所づくり」や「総合型地域スポーツクラブ」の推進事業をもとに、地域、家庭、学校の連携を図り健康な子どもの育成への環境づくりに取り組んできた。しかしその後も青少年のからだに関する問題は後を絶たない現状である。現在の子どもたちのみならず、子どもたちが将来親としての役目を担う代において、「ひと・もの・こと」と「まるごとのからだ」で触れ合ったりしながら積極的に身体活動に取り組む環境づくりが大切な条件となる。

本学の文学部総合人部学科身体運動文化専修では、1999年から「生涯スポーツ研究ステーション計画」を推進してきた。関西大学をステーション（体験・経験の場）とする本計画の具体的施策方針として、下記の4項目について取り組んでいる。

- ①少子化問題に関して⇒子どもの「生きる力」の育成問題考える授業の開発や、「生活文化と遊びの問題」を考えるステーションとし

て位置づける。

②人間交流問題に関して⇒異世代間交流における人間関係を考えるステーションとして位置づける

③生き方の問題に関して⇒生活世界「ひと・もの・こと」と人間の「かかわり」のあり方により、「からだ」を通して「からだ気づき」や「体ほぐし」の問題を考えるステーションとして位置づける。

④高齢化問題に関して⇒高齢者の健康・余暇生活のあり方、異世代交流の問題を考えるステーションとして位置づける。

上記それぞれの問題の取り組みについては、「公開授業」や「リカレント研修会」を開催するなどし、地域・社会・大学が一体となって、「新しい体育」のあり方を探究してきた。本稿は、現在の社会環境、生活環境を視野に入れながら、上記の問題の取り組みの中で、主として現代の子どものからだや、子どものライフスタイルの現状をさぐりながら、「体育教育の課題」についての一事例を述べたい。

1. 子どもの体力とライフスタイルの現状

1-1 体力について

文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもの体力・運動能力は1985年ごろから低下傾向が続いている。表1に示すとおり現在の子どもの体力・運動能力の結果をその親の30年前と比較するとほとんどのテスト項目において、子どもの世代が親の世代を下まわっている。逆に体格については、親の世代を上まわり身長では男子の3.6cm、女子が6.1cm、体重で、男子7.0kgと女子5.3kgと増加している。

子どものからだと体育教育の課題（田村）

表1 11歳の時の体格・運動能力の比較

項目	性別	男子		女子	
		親の世代	今の子ども達	親の世代	今の子ども達
身長 (m)		141.9	145.6 (↑3.7)	144.6	147.4 (↑2.8)
50m走 (秒)		8.8	8.9 (↓0.1)	9.1	9.7 (↓0.1)
ハンドボール投		34.5	30.2 (↓4.3)	19.8	17.2 (↓2.6)

※出典:文部科学省「体力・運動能力調査」2005

これらの結果から、体格が向上しているにもかかわらず、体力・運動能力が低下していることは、身体能力の低下いわゆる行動体力において深刻な状況にあることを示しているといえよう。最近の子どもは、靴の紐を結べない、スキップができないなど自分の身体を操作する能力の低下についても顕著である。また表2で示すとおり、正木健雄らの調査によると、1979年の項目には入っていなかった「すぐに「疲れた」という」が2000年代に入り8割の数値を示している。その実態を調べてみると、子どもの脳（前頭葉）の発達と密接な関係があるという。

表2 小学生の実感調査

1979年		2000年	
1, 背中ぐにゃ	44%	1, アレルギー	82.2%
2, 朝からあくび	31	2, すぐ「疲れた」という	79.4
3, アレルギー	26	3, 授業中, じっとしていない	77.5
4, 背筋がおかしい	23	4, 背中ぐにゃ	74.5
5, 朝礼でバタン	22	5, 歯並びが悪い	73.2
6, 雑巾が絞れない	22	6, 視力が低い	71.1
6, 転んで手が出ない	22	7, 皮膚がカサカサ	67.4
8, 何でもない時骨折	19	8, ぜんそく	62.7
8, 腹の出っ張り	19	9, 症状説明できない	61.9
10, 懸垂ゼロ	18	10, 平熱36度未満	60.9

出典:「子どものからだと心白書」2000

また、1970年から2000年にかけて肥満児が2～3倍に増え高血圧、脂肪肝、糖尿病などの生活習慣病予備軍も増加している。運動不足、体のリズムのみだれ、脳の発達不全、などによる子どもの体力の低下は、将来的に国民全体の体力

低下につながり、「生きる力」をも失いつつあり、ひいては社会全体の活力が失われるという事態に発展しかねない。このような状況は子どものライフスタイルについても問題があると考ええる。

1-2 ライフスタイルの変化

子どもの体力の低下の原因は、親をはじめ国民の意識の中で、外遊びの重要性を学力の状況と比べ軽視する傾向が進んだことにあると考えられる。日本の子どもたちは、以前は大勢で群れをなし野山を駆け巡り、友達とぶつかり合い、川で泥んこになって遊んだものである。その中で身体運動や感性を養ってきた。泣いたり、笑ったり、傷ついたりする中で人の心の温かさや、友情を育み、自他の存在を実感しながら「生きる力」を育ててきた。表3で示すように運動実施の割合（学校での活動を除いたもの）を親の世代（1972年度の11歳）と今の子どもたちを比較してみてもその差は歴然としている。

表3 週3日以上運動を実施する子どもの割合の比較（%）

男子		女子	
親の世代	2004年の11歳	親の世代	2004年の11歳
78.8	59.3 (↓19.5)	74.1	34.8 (↓39.3)

出典：文部科学省「体力・運動能力調査」2005

また、遊びのスタイルを2003年「21世紀の遊び予測調査」(くもん子ども研究所)の結果から見ると、1位 コンピューターゲーム(92.7%)、2位 トランプ(58.5%)、3位 プラモデル(46.8%)、4位 ドッジボール(44.4%)、5位 ローラースケート(41.9%)をあげている。遊ぶ場所としては、近くの公園、自宅や友人宅で遊び、同年齢の仲間と少人数で遊など、伝承的な遊びや自然の中での活発な遊びが減少している。これらの遊びのスタイルは創意工夫や創像意欲を掻き立てる遊びではなく、あらかじめ与えられたルールや手順に従って楽しむ遊びが主流を示している傾向にある。

寺沢は、運動は脳の前頭前野を活性化させるという。しかし動的な遊びから静的な遊びへの移行は、子どもに運動不足と大脳活動の発達の遅れをもたらす

子どものからだと体育教育の課題（田村）

たと指摘する。遊びのスタイルの変化によって運動量は減少し、人と人とのふれあいが少なくなったために、脳の前頭前野の部分をあまり使わなくなったことが原因と考えられる。

現在の子どもたちを取り巻く生育環境は急速に変化し全人的な経験の場が極端に少なくなった。それに代わって情報機器を介したバーチャル経験が増大し、子どもたちは漏れる情報から経験していないことでも、実際にやったり、わかったような気になってしまう。

子どもは、遊びを通して感性を磨き運動能力や創造力を高めていくのである。そして想像力を働かせながら、他人を思いやること、人間関係をつくる力、集団でのルールを守る心、忍耐力、責任感、積極的な意欲や自発性などが養われ「自分のからだに気づき」、また「他人のからだに気づき」、こうして子どもの健全な発達が達成させるのである。

子どものころや体力づくりには、時間（授業時間、遊び時間）、空間（野外）、仲間（直接会話や身体的接触）、いわゆる“3間”が重要である。子どものライフスタイルの問題に関しては、子どもだけの問題ではない。大人が、家庭が、社会が、学校が、取り組まなければならない問題であり、特に学校での体育教育に携わっている者にとって、「からだとのかかわり」への具体的方策を探究することが課題である。

2. 「ころと身体を一体として捉える」体育教育

小学校学習指導要領の改訂に伴い体育科に「体ほぐしの運動」が導入された。「心と体をより一体として捉え……」という趣旨から、「仲間との交流」、「体の調整」「体への気づき」を内容としたものである。みんなと一緒に運動することで、仲間と交流し、体の調子を整え、自分や友達の心やからだに気づくのである。そこには、前述したように、時事変化する生活環境において、ほぐされなければならない子どもの硬い心とからだがあるからである。こうした今日的課題に対して導入された「体ほぐしの運動」は、「ころほぐし」、「人間関係ほぐし」でもあり、コミュニケーションスキルを磨き上げるにはすばらしい機

会を提供する場である。特に「仲間との交流」は、そこに生きる体をまるごと全体で捉えようとするホリスティックな発想がある。これが学校体育の新しい展開や可能性につながるとすれば、それは「体から心への発信」にあると言えるよう。

3. 「小学生と大学生の交流授業からみえたもの」

—「体ほぐしの運動」実践から—

2002年新学習指導要領の完全実施に伴い、近隣の吹田市立山手小学校より学生との交流授業を計画する要請を受け双方の協議を経て立案し、小学校のカリキュラに合わせて1学期から3学期の間に合計3回の交流授業を行った。

1：交流授業の概要

交流授業は下記の3つのテーマで行った。この交流授業は、吹田市立山手小学校においては「体ほぐしの運動」実践の一環として「大学生との交流」を目的としたもので、本学の学生は「公開授業」の場を活用した。

「公開授業」は1994年から身体運動文化専修・体育学教室で取り組んでいる。毎年、春学期及び秋学期に吹田市教育委員会の後援のもとに、地域住民や、本学の教職員、学生の参加をよびかけて開催し、「大学」と「地域社会」の架け橋になっている。今回は、3テーマの履修学生（「リズム体操指導法研究」、「ジョギング指導法研究」、「ラグビー」）が、地域住民の参加者及び小学生を対象として「指導法の実践研究」として企画立案している。

- ① 1学期⇒4年生（男女70名）を対象とした「リズム体操」（6月実施）
- ② 2学期⇒5・6年生（男女70名）を対象とした「ジョギング」（11月実施）
- ③ 3学期⇒5・6年生（男女70名）を対象とした「ボールゲーム」（1月実施）

1-1 児童と学生との交流：リズム体操

「心も体も軽くなってスイッチ・オン！ 心も体も優しくなって弾んで！」

子どものからだと体育教育の課題（田村）

6月中旬、梅雨の時期であったが、とても蒸し暑い気候の中を、児童は吹田市立山手小学校から関西大学中央体育までおよそ20分の道のりを担任の先生に引率されて到着した。体操服に赤と白の帽子姿で、顔には、汗がたっぷり流れていた。体育館の玄関先で「リズム体操指導法研究」の履修学生が、大きな声で「こんにちわ」と拍手で出迎えた。子どもたちも担任の先生に促されながら「こんにちわ」と大きな声で応える。きちんと2列に並んだままで、2階の体育室へ緊張した面持ちで行進である。

小学生は広い体育館に慣れていないせいも、隅のほうにまとまってしまう。学生が中央に誘導するのであるが、4年の担任の先生の指示が無ければ動かない。いつもすべて「先生」の管理のもとに動いているのだと、学生たちも感じ取った。学生が、「体育館の中も暑いので、みんな帽子を取りましょう、暑いから汗を拭きましょう」と促しても児童全員が「先生」の顔を窺うのである。私のほうから「帽子をつけていないといけないのですか」と担任の先生に聞いてみたところ、「先生」から「暑いから帽子とっていいよ」と言われて全員が一斉に帽子を脱いだ。全て担任の先生の指示に従って行動する児童をみて、側で学生たちは目をあわせていた。

帽子を取ると児童も少し解放された様子ではじめて笑顔をみせた。汗も拭き気持ちも解れてきたところで、軽快な音楽を流すと児童たちは、自由に走り回ったり、スキップをしたりしながら次第に学生たちと打ち解けて、手をつないだり甘えるしぐさを見せはじめる。本番のリズム体操の指導は、授業で行っている本学オリジナルの「かんだい体操」をフォークダンス風にアレンジし、児童と学生がかかわりやすいように、また学生が指導しやすいように、簡略化して実施した。リズム体操も終盤に差し掛かるころには、児童と学生が溶け合っただけで会話が弾む。担任の先生も児童と同じように楽しんでいる。約40分間動いた後、ストレッチ運動で終わる。最後のストレッチでは、児童と学生が一体となって、まるで「川の字」のように横たわり呼吸をととのえながら、体をすり寄せるようなほほえましい光景をみせてくれた。学生たちも、小学生を迎え、リズム体操を指導することは他の授業で体験することのできない機会を得たこと

で、緊張感と終えた後の満足感に浸っていた。児童は授業の感想をつぎのような作文に綴ってくれた。



小学生との楽しい交流

体がはずむ。心がひらく。
いのちがおどる。
リズムにのって、みんなが夢中。

〔子どもの目〕

◇今日関大に行きました。リズム体操は跳ぶとかは無かったけど、走ったり、歩いたりして学生さんと向き合って躍ったりして楽しかった。最初は、大学の先生が「このダンスは途中で止まらないよ」といったので「激しいダンスなのかな」と思ったけど、少しやさしかった。先生の合図で「替わって」と言ったので、学生さんとチェンジとかして面白かった。学生のお姉ちゃんと同じ向きあっている時「暑いね」といって話しかけてくれたのがすごくうれしかった。お姉ちゃんたちはダンスがとても上手でした。最後はみんなできれいな曲を聞きながら寝転がりました。心が落ち着きました。お兄ちゃんや、お姉ちゃんとはしゃべっていると、とても楽しかった。みんなとても優しくかった。また来た時はバスケットとかしたいです。

◇僕はダンスに興味がなかったけど、関大のお兄ちゃんやお姉ちゃんが簡単におしえてくれた。関大の学生さんは、とても上手にダンスを踊っているのを見てすごいなと思った。僕は途中で疲れて少しやる気をなくしたけれど、お兄ちゃんやお姉ちゃんが何回もやってくれたので楽しくなってきた。今日はダンスをしたので、今度は、あの大きい体育館で組み体操の練習をしたい。最後は電気を消して全員で寝転んだ。静かな音楽が流れて、それまで心労かっ

たけど気持ちよくなった。僕はけっこう体が硬かったので、今日はリズム体操をしてちょうどほぐれた。

◇今日、関大に行った。体育館に着くと大学生が拍手で迎えてくれた。体育館の広いのにびっくりした。女子の学生さんだけかと思ったら、男子の人もいた。ダンスが始まった。全然知らない曲が流れた。その曲はなかなか終わらない。大学生の人たちはダンスがとても上手だった。前に立っていたおばちゃん（公開授業に参加していた地域住民の方）は、すごくノリノリだった。大学生の人は皆親切で優しく教えてくれた。ダンスが終わって寝転がって目を閉じたとき、とても気持ちが良かった。

◇今日僕は関大のお兄ちゃんやお姉ちゃんと一緒に「かんだい体操」をした。かんだい体操は必ずどこか体を動かしていて、いろいろな人と組み替えて躍っていたので、みんな汗だくになって躍っていた。かんだい体操は、はじめは心労かったけど後でだんだん楽になった。「もっと躍りたい」という気持ちになりました。僕は思う。今日大学の人たちと一緒に躍ったかんだい体操は、いろいろな人と汗をかいて、大学の人たちとどんどん仲良くなれる体操だと思いました。

授業終了後、担任の先生から「今日覚えたリズム体操を秋の運動会でやろうか」と問いかけられた児童たちは一斉に「やる」という返事を返していた。その後、山手小学校の担当教員と本学の授業検討委員会（身体運動文化専修・体育学教室の中にある委員会）との研究討議と実践研究とを経て9月の運動会で「かんだい体操実演」が実現することになった。

1-2 児童と学生との交流：ジョギング

2学期吹田市教育委員会の企画で、毎年秋に吹田市の小学校5・6年を対象とする陸上競技会が開催されている。そこで山手小学校との研究討議会において行事の事前に正式な公認の陸上競技場で「走ってみる経験をさせてやりたい」という希望が提案されることになった。双方の計画合意のもとに「正しい走り方を身につける」ことを目的として、公開授業「ジョギングの指導法研究」に



小学校との楽しい交流

素敵な全天候型グラウンド。
足取りも軽い。
マラソン選手を夢見て……。
大学生は早いな……。

山手小学校の5・6年が参加することになった。

11月の当日は晴天に恵まれ、児童たちは関大の中央グラウンドに到着すると、人工芝のフィールド、全天候型の公認トラックにびっくりした様子であった。ジョギング指導法研究の履修学生と、「吹田市走ろう会」のメンバーの皆さんの参加、一般市民の参加、のもとに、児童と学生と一般市民のまさに異世代交流の公開授業となった。おりしも、関西大学へ交換研究員として来学していた、ドイツのゲッティンゲン大学のアルト・クルガー教授も参加し、児童の指導にあたってくれた。クルガー氏は若き日に陸上競技選手としてメキシコオリンピック大会に出場した経験を有しており、児童たちは、同氏の「走り方」について手ほどきを受けて予期しない出会いに大喜びだった児童たちは同氏との質疑応答の場を得て大いに「走る」事への関心を膨らませていた。

〔子どもの目〕

◇今日、関西大学へ行ってジョギングをした。最初に大学の先生から短距離走、長距離走、ジョギングの説明があった。私はマラソンやジョギングは同じようなものだと思っていたのに、ジョギングはゆっくり走るものだとわかりました。それに、人と話しをしながら走るとあまり疲れなし、頭も良くなると聞いて、友達と話しながら走りました。するとあまり疲れなくて、いつも

は運動場を5周すると疲れるのに、1周400mのグラウンドを20分間で7周も走ることができました。でも疲れませんでした。最後にドイツ人の先生が「走るときは音をたてない」とアドバイスをしてくれて、一緒に1周走ったのですが、とても速くて追いつけませんでした。でも楽しかったです。

◇今日は関西大学でジョギングをした。大学の青木先生が短距離とランニングとジョギングの違いを教えてくれた。最初に短距離走の見本を学生さんがしてくれて、歩幅を広くして思いっきり走るのだそうです。ランニングは二番目に歩幅の広い走り方で、ジョギングは一番小さい歩幅で話しながら走ると聞いてびっくりしました。今度は僕らが走ってみた。走っている横を青木先生や学生やおじちゃん達（吹田市走ろう会ノメンバー）がどんどん抜いていたので、見ていたらスピードを落とさないで速いペースで走っていたからびっくりした。ジョギングが終わると、ドイツの先生が来てくれていた。その先生は、小学校5年生くらいからオリンピック選手になることが夢で、いつもエレベーターを使わないで階段を登っていたと言った。また、友達を負ぶって走ったり、重いものを持って走ったりして体を鍛えていたと言った。その先生からは、走り方も教えてもらった。その走り方は、インディアンの走り方と、カウボーイの走り方で、カウボーイの走り方は足をバタバタいわせて走るのだめ、インディアンのように音をたてないで走ると無駄な体力を使わないで走れると言った。言われたとおりに試した。ジョギングは少し疲れたけどドイツの先生の話が聞いてよかった。楽しかった。

◇今日は関大に行って「走る」というのはどんなのかを教えてもらった。ジョギングというのは友達と話し合えるくらいのスピードで走るのがちょうどいいというのがわかった。僕の担任の先生はいつも反対のことを言っている。黙って走れと言う。話しながら走ると、時間がすぐ終わったように感じて、こんなに楽しくジョギングができたのは初めてで、いい思い出になった。

◇手を骨折していたので、おばさん（公開授業に参加した地域住民の方）と内側（フィールド）を一緒に歩いた。知らない人で緊張した。本当はみんなとトラックの所を走りたかった。ショック！。おばさんと習い事や、将来のこ

と、学校のことなど話した。人工芝の所を歩いた。一步一步、歩くのが楽しかった。帰りにおばちゃんが「遊びに来てや、今日はありがとう」といった。私と友達は大きな声で「ハイ」といった。

1—3 児童と学生との交流授業：ボールゲーム

3学期、年明けのグラウンドはさすがに寒いですが、フィールドの人工芝は太陽熱を含んでいて暖かい。ボールゲームをするには恰好の場である。児童たちは、いつもはドッジボールやサッカーボールやバレーボールなどの円形ボールには馴染みがある。そこで今回のボールゲームは、グループワークで普段あまり触れることの無い楕円形のラグビーボールを使ったボールゲームを体験してもらおうと計画を練った。バウンドすれば思いもよらないところに転がって、そのたびに歓声があがる。仲間作り運動には効果的である。



小学生との楽しい交流

初めて手にするラグビーボール。
あっちにコロコロ。こっちにコロコロ
「うまく取れないぞ」

〔子どもの目〕

◇今日、関大で初めてラグビーボールを触った。大学の先生がラグビーのことを教えてくれた。ラグビーボールは、いつもの丸いボールとは違い楕円なのでキャッチしにくい。まずはキャッチボールの練習から、関大のお兄ちゃんが「したから上へギリギリまで投げると真っ直ぐ飛ぶから」と教えてくれた。すぐ試すと、うまくできて相手に渡せた。何回も投げていると、だんだん慣れてきて面白くなってきた。

◇今日、関大へ行って、広い芝生の上でラグビーをした。ラグビーボールは楕円なので、下に落ちて跳ね返ったら自分のところに戻ってこないの取りにくい。ラグビーは男子がやるものだと思っていたけど、女子にもできるんだと思った。僕はテレビでしかラグビーをみたことがないので、一度やってみたかった。自分でできてすごくうれしい。今度ラグビーができれば、ルールを覚えてみんなで試合をやりたい。

◇僕は初めてラグビーの体験をした。テレビを見といてすごく格好良くて、一度やりたいと思っていた。最初はすごく寒かったけど、ゲームに夢中になると暖かくなり楽しくなった。すれ違いのパスは、簡単そうで難しかった。ボールを集めるゲームは、面白かったけれど、僕らのチームは、一度も勝てなかったのが残念だった。

◇面白かったけど少し難しかった。ボールを3個集めるゲームもやったが、ずるをしている人もいた。ボールを取に行く距離を短くしたり、ボールを一度に2個も3個も持って行く人がいた。何回も投げたり受け取ったりしていると、みんな上手になった。もっとやりたかった。最後に体操をしてグラウンドを一周走ったりした。初めてやったけど、とても楽しかった。

年間を通して三回の交流授業をおこなった。核家族化や少子化により異世代交流の少ないことが指摘されている昨今、交流授業をとおして学生たちは直接子どもに触れる機会を得て、付加価値を得たこと、また、子どもたちは、「子どもの目」からも見て取れるように、体育授業の場において、「いま・ここ」で起こったことに、「からだが開き」、「動き」、「仲間と関わり」、日ごろ感じたり、触れたりしたことのない、多くのことを学び、体験し、「楽しい体育」を実感できたと考える。

5. おわりに

戦後50年以上にわたって、わが国の体育はスポーツを中心として展開してきた。スポーツ種目は、技の系統性やルールなどが明確であって、かつ指導者の

経験も豊かである。文部科学省が新学習指導要領に示した「体ほぐしの運動」の指導については現時点では、アラカルト的に活動が紹介されているに過ぎず、指導者の経験も不足していると考ええる。スポーツの特性に馴染んだ指導者にとっては戸惑いがあるだろう。「体ほぐしの運動」は、まったく新しい運動を作ったわけではなく、今までの運動やスポーツの部分を、見方や考え方を变えてく組み立てられたものであると考える。そこには、指導者自身の体験に基づいて教材化できるものを選択し、独自に新しいカリキュラム開発を行う体育教育の課題となる。

子どもたちが「これならできそう」、「みんなと一緒に動いていたら楽しくできた」、「夢中になって動いたのでいっぱい汗が出た」となった時、心と体が解放され、運動を楽しむことができるであろう。これからの体育教育は子どもたちの内面を突き動かす指導者の働きかけが問われことになる。指導者が発想の転換をはかり、「教えたい」ことではなく、「ふれあうからだ」コミュニケーションするからだ、に転化していく過程を授業として組み立てていくことである。それには、指導者のこころとからだは柔軟に解きほぐされていなければならない。そこには自ずと遊びをベースとしてのプログラムの開発が展開され、そこから子どもたちは自己の課題を見つけて主体的に「楽しい体育」と取り組む態度や能力を養っていき、ひいては現在及び将来にわたって運動に親しむ資質を養うことにつながると考える。

参考文献

- 小学校学習指導要領解説 体育編 文部科学省 東山書房 1999
小学校学習指導要領の展開 体育科編 明治図書 池田延行、戸田義男編著 2002
文部科学白書「教育改革と地域・家庭の教育力の向上」 文部科学省 2005
小学生白書「小学生まるごとデータ」 学習研究社 2004-2005
正木健雄「いつも元気」—どうなってるの？子どものからだ— 全日本民医連 2003.10
NO144
大友照典「体育科教育」大修館書店 2006.02
寺沢宏次「子どものこころとからだを強くする」 市村出版 2005 pp16-29
体育科教育 大修館書店 2004.10, 2006.03, 07

子どものからだと体育教育の課題（田村）

高橋和子「子どもの生活世界へのまなざし」丸善株式会社 2003 pp7-30

門脇厚司「子どもの社会学」岩波新書 1999

毎日新聞 子どもに伝えたい 1998.2.27

諏訪哲二「オレ様化する子ども」中央公論新社 2005